

変則マルチアンプシステム(5)
—EMI DLS259 の置き換え—

1. 始めに

前報(4)までは、JBL4350A のマルチアンプシステムのダブルウーファーとスーパーツイーターを使って、これに他のスピーカーを全帯域で重ね合わせする方法について実施してきましたが、今回から、JBL4350A の 250Hz~1.25KHz のミッドバスからツイーター領域を他のスピーカーと置き換える変則マルチアンプシステムについて報告していきます。今回は、BL4350A の 250Hz~1.25KHz のミッドバスからツイーター領域を EMI DLS259 に置き換えてみます。

2. ミッドバスからツイーター領域の置き換えの試聴方法

JBL4350A のマルチアンプシステムのダブルウーファーとスーパーツイーターをそのまま使って、250Hz~1.25KHz のミッドバスからツイーター領域は現在の芦屋ベルステレオオリジナルの 45pp アンプで EMI DLS259 を駆動します。従って、EMI DLS259 は 250Hz~1.25KHz の帯域のみを使用することになります。

入力信号のルートとしては現在の標準となっている次のルートを使用します。

EMT981 (44.1KHz) /BZT-9000→ CCV-5 (96KHz) →SWD-DA10 (192KHz)
→DA-3000 (44.1KHz) →MYTEK DIGITAL 192-DSD

ここで、EMT981 には GPS-777 から 44.1KHz のクロックを、CCV-5 には 96KHz のクロックを、SWD-DA10 には 192KHz のクロックを供給します。また DA-3000 には ABS-7777 から 44.1KHz のクロックを供給します。

3. ミッドバスからツイーター領域の置き換えの試聴結果

今回は EMI DLS259 を用いて JBL4350A のマルチアンプシステムの 250Hz~1.25KHz のミッドバスからツイーター領域を受け持たせてみたわけで、前報(1)では EMI DLS259 のアンプは IPC AM1029 でしたが、今回は JBL4350A のマルチアンプシステムの 250Hz~1.25KHz のミッドバスからツイーター領域を受け持つ 45pp アンプをそのまま使用しています。こういった変則システムは組み合わせるスピーカーの音色の違いなどで違和感が残るのが通例ですが、前報(1)と同様に意外に馴染がいいというのが第一印象ですが、レベル合わせを一からやりなおす必要があり、最適な条件が達成できているか、少し不安が残ります。

EMI DLS259 の側からの変化を述べますと、高域の倍音が伸び、低音の響きや沈みこみがまったく違うことは前報(1)と同様です。しかしながら、前報(1)では音楽の微

妙な表情を良く伝えてくれていましたが、少し反応が鈍いようです。このことは恐らくアンプとの相性で、前報(1)で使用した IPC AM1029の方が45ppより抜けの良い音がすることに起因していると推測しています。

JBL4350Aのマルチアンプシステムの側からの変化を述べますと、JBL4350Aの抜けと切れ味の良い個性が消え去り、地味なEMI DLS259中心の音になってしまったと言えます。

4. まとめ

水と油みたいなJBL4350AとEMI DLS259ですが、思ったよりはよく馴染んで新しい個性のシステムになったと言えますが、少し地味すぎるきらいもあります。EMI DLS259の駆動アンプを選択していけば、さらにこの変則システムを活かせるのではないかと考えています。

以上